

# 健康教育の視点から、本学学生の 喫煙に関する意識と実態調査

松 木 伸 子      植 田 芳 子

## はじめに

喫煙が健康に及ぼす悪影響については、1950年代より指摘されるようになり、WHO、米英などで多くの報告書が出されている。これらの報告書によると、長期多量の喫煙は肺がんばかりでなく、呼吸器系疾患や、循環器系疾患、さらには胎児の発育障害に至る広範囲な健康障害を引き起こすとされ、この事は多くの人が知るところである。

近年の喫煙者率は、昭和41年、(男83%、女13.1%)以来漸減傾向にあるが、昭和63年(男61.2%、女13.1%) 昨年平成元年では(男61.1%、女12.7%)と嫌煙権が市民権を得た今日でもまだタバコの愛好者は多い。最新の世界各国の喫煙率を日本と比較してみると、男性の喫煙率は、米国(30%)、英国(36%)、西独(44%)、オーストラリア(37%)となっており先進国各国よりはるかに高い数字になっている。日本同様、6割以上の男性がタバコを吸う国としては、バングラデシュ、ボリビア、中国、インドネシア、ベネズエラ、トンガ、スワジランドなど、アジア、アフリカ、南米の開発途上国ばかりである。特徴的なのは、先進国では男女の喫煙率がほとんど変わらないのに対して、日本の男女には大きな開きがある点で、これは喫煙率が高い開発途上国に共通した傾向である。特に欧米各国ではこの20年来、継続的なタバコ対策が取られており、喫煙率も大きく下がり、米国では1970年代に40%台であった男性喫煙率が、1987年には30%にまで低下、英国でも10年間に50%台から30%台にまで落ちたと報告されている。しかし日本は、85年までの10年間で、12ポイント下がって60%台になって以降、ほとんど横ばいとなり、ここ3年間は61%台にとどまっている。これを年令別に見ると、男女とも20代が各年代を通じて最も高率になり、男子は40代50代が、めだって減少していると言われている。こうした傾向の中で、最近特に若年層、中でも若い女性の喫煙が大幅に増えている事は、女子大学で保健体育教科を教える者として、憂慮すべき現象としてとらえている。

女性特有の生命現象としての妊娠、出産、乳汁分泌と関係した影響があり、妊娠中は勿論であるが、それ以前にあっても新しい生命の芽生や成育とも喫煙は無関係ではありえない。多くのデーターは女性特有の喫煙害を警告している。にもかかわらず、女性向けタ

## 健康教育の視点から、本学学生の喫煙に関する意識と実態調査

タバコの発売や、テレビ等による派手な宣伝により、喫煙はファッションの一つとして取りあつかうなど、マスメディアの課す影響が大きく、女子大生の喫煙は増大の一途をたどっている。

本学においては、昨年より学内禁煙に踏み切った「学内禁煙」のポスターが学生ホール、食堂等に掲示されたが、ポスターを横目に、学生の喫煙はあとをたたない。灰皿のない場所での喫煙は、いろいろな問題点が表れて来る。学内禁煙に踏み切って一年、禁煙に対する教職員の対処もさまざまであり、多年にわたり喫煙は個人の嗜好として受容されてきた歴史がある中で、喫煙学生に対する指導も、教師全体の意志統一は難しい。

保健体育科としては、健康教育（保健教育）の一環として禁煙をとりあげ、タバコに対する意識調査及び喫煙の実態を把握し、健康教育にとどまらず、人間教育として、幅広くとらえた中で禁煙教育を進める手立てとしたい。

### 方 法

イ、調査時期 平成2年1月下旬

ロ、調査対象 本学昭和63年度入学生（400名）、平成元年度入学生（404名）

ハ、調査方法 質問紙によるアンケート調査（16項目の内容に回答してもらった）

まず学生に、「タバコを吸った経験がありますか」と率直に聞いてみた。図1がその回答結果を示したものである。

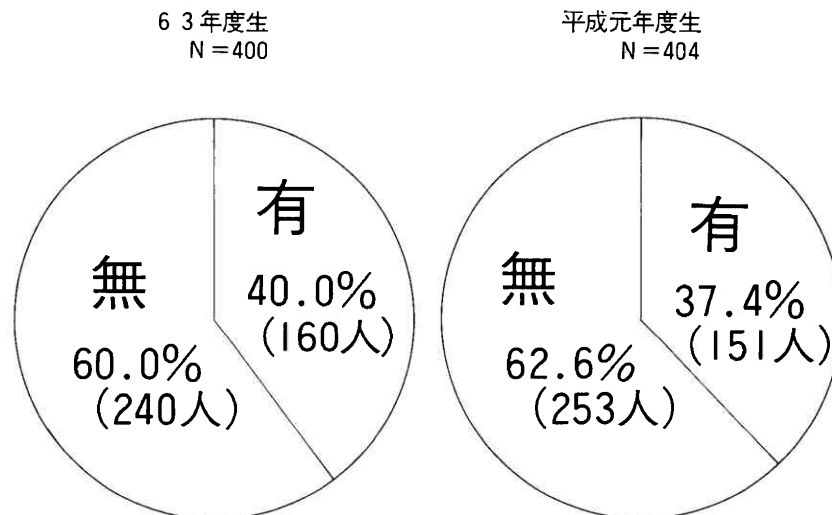


図1

一度でも吸った事があると答えた学生は、図で示すように、63年度生40%（160名）、平成元年度生37.4%（151名）

この数値は予想をはるかに越えるが、我が国では、未成年者の喫煙禁止法があるにもかかわらず、それほど厳密に施行されていないのは衆知のとおりである。たとえば大学生は一応は大人と見なされているせいか、その中には未成年者も含まれているにも拘わらず、その喫煙はほとんど規制されていないのが現状である。

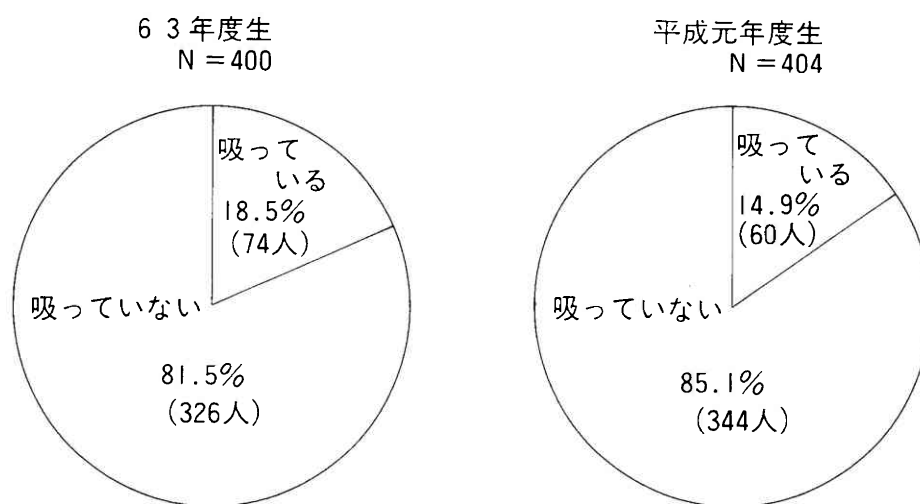


図2 現在タバコを吸っていますか

タバコ自動販売機の所構わずの設置や、マスメディアによる宣伝は、タバコへの興味をさそい手軽に入手が出来る事から未成年者の喫煙率増加も現実的なものとして捕らえることができるのである。

しかし、女子学生の場合は、[あなたは現在タバコを吸っていますか]の問いに、吸っているとイエスの答えを出した学生は、18.5%（63年度生）と14.9%（平成元年度生）と、一般女性の平均値12.7%と比べるとやや高く、63年度生の18.5%は、気になる数値である。この2つの図（1、2）から推察すると、中学校、高等学校時代からかなりの学生が喫煙に興味を持ち、1、2度の喫煙を含めて、吸った経験があると考えられる。しかし、表（1）が示すように、現在タバコを吸わないと答えた学生が21.5%あり（63年度生）22.5%（平

表1 喫煙の有無

	63年度生	%	平成元年度生	%
A－毎日吸う	51	12.8	43	10.6
B－時々吸う	23	5.8	17	4.2
C－今は吸わない	86	21.5	91	22.5
D－吸った事がない	240	60.0	253	62.6
合 計	400		404	

成元年生) と、中高生で経験があっても常習喫煙者となる学生は、男性に比べればはるかに少ない事がわかる。

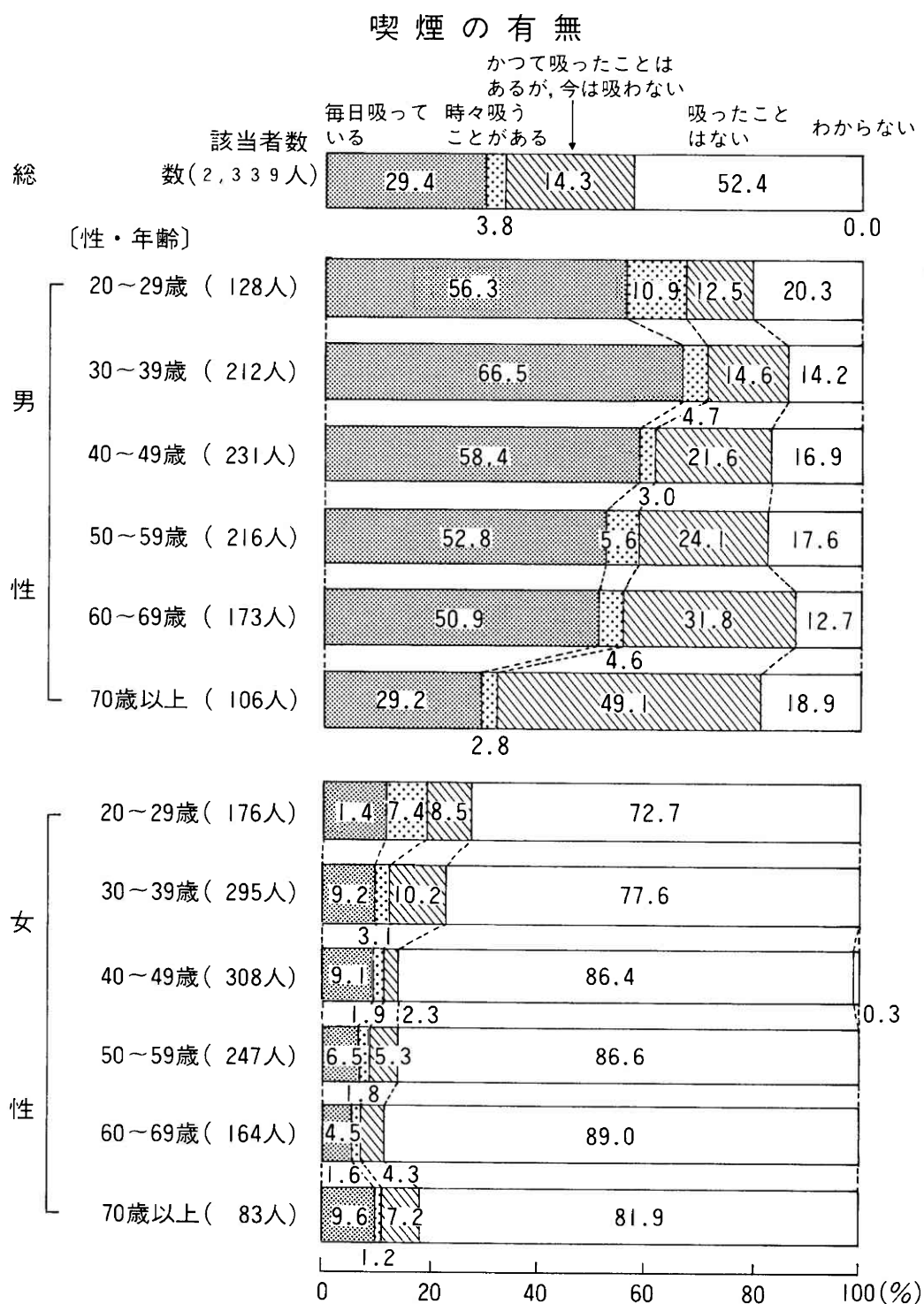


図3 喫煙の有無

前に述べた様に（厚生省の調査）日本においては、喫煙の男女差は大きく、年齢別に見ると次の図（3）で示すように、全体の数値の低い女性の場合は20代が最も多く70才以上、30代と続く。

表2 喫煙経験あり・いつ頃からか

	63年度生	%	平成元年度生	%
A－大学	57	35.6	25	16.6
B－高校	36	22.5	60	39.7
C－中学	59	36.9	51	33.8
D－小学	8	5.0	14	9.3
E－回答なし	0	0.0	1	0.7
合 計	160		151	

表3 吸い始めた時期

	63年度生	%	平成元年度生	%
A－大学	30	40.5	6	10.0
B－高校	21	28.4	27	45.0
C－中学	23	31.1	23	38.3
D－小学	0	0.0	4	6.7
合 計	74		60	

10代の数値は、はっきり知る事ができないが若年層の喫煙率が増大していると言われる現状では、今だかつて、日本では見られなかった風潮として、若年女性の喫煙は、市民権を得たごとく増大していると推察されるが、まだまだ欧米に比較して、女性全体の喫煙率は低く、こればかりは、男性と肩を並べたくないものである。

〔あなたは現在タバコを吸いますか〕の問いにイエスと回答した63年度生（74人）平成元年度生（60人）の学生は、一体いつ頃からタバコの味を覚えたのか聞いてみると、次の表（2）である。この表から見ても中学、高等学校で過半数が喫煙を始めることがわかる。

学校における喫煙防止の教育現状を考えてみるに、これまでの我が国における青少年に対する喫煙防止教育のひとつに、青少年の喫煙を反社会的問題行動ないしは、非行の前兆としてとらえ、生徒指導や生活指導上の問題として取り扱う風潮が強い。喫煙を健康問題との関連で、捕らえることが希薄であったことがあげられる。学生等が中高時代喫煙を保健教育として、どのような方法で誰に指導を受けて来たかは後で、くわしく項目をもうけ

て考察してみたい。喫煙学生のお半が中高時代に喫煙を始めた事は表（3）からも推察出来るが63年度生40.5%、平成元年度生10%を見ると大学入学後喫煙を始めた学生も少なくない。当然ながら学生生活を積み重ねるほど、その率は高くなる。

この事から、生活の中で拘束が少なくなり、ある程度大人として認められる大学生にとって、ちょっとした切っ掛けで喫煙を始め常習喫煙となって行く事は、いまの風潮からも容易な事として考えられる。この数字からも大学での禁煙教育も方法と実態をふまえての指導は当然研究すべきであり学内禁煙を押し進めて行くためにも、必要かつ大切な健康教育の一領域としてとりあげることは有効な手だてと考えられる。

喫煙の開始年齢は本学では表（2）（3）の通りであるが、厚生省の集計図では図（4）でありこれからも女性の場合では、〔20才～30才未満〕59.3% 次いで〔20才未満〕20.4%と〔30才以上〕14.9%で吸い始めた者ほぼ同じ割合になっているところから女性の場合、喫煙率は低いが、ささいな切っ掛けで年齢をとわず喫煙を始めるようになる傾向があると推察される。

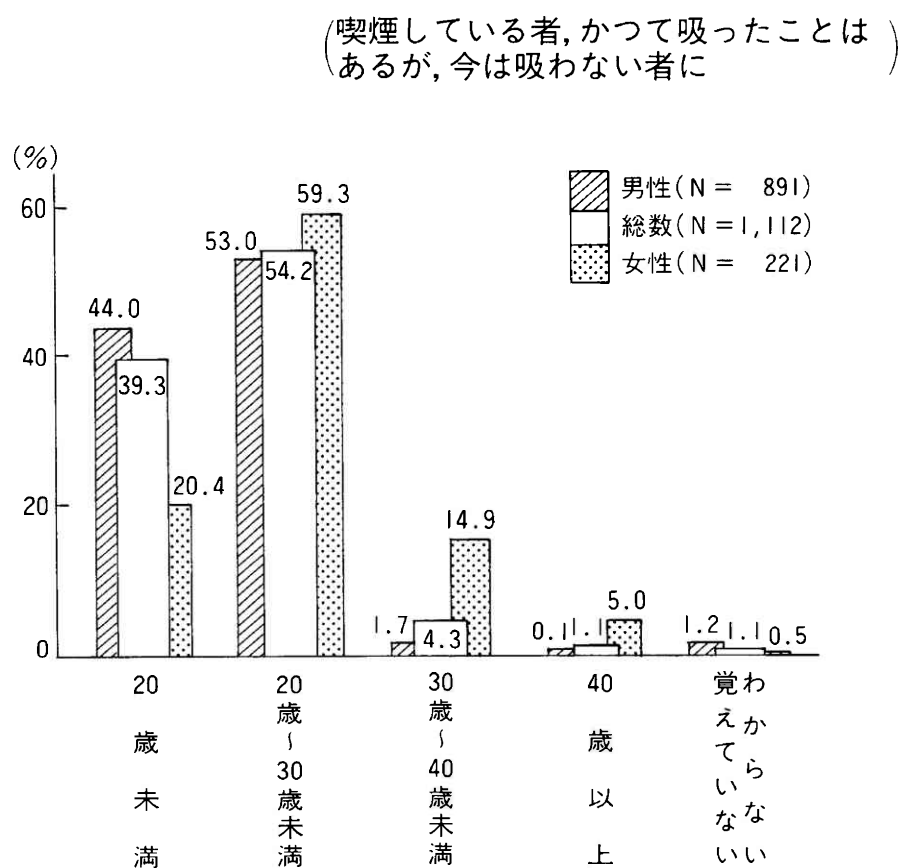


図4 喫煙の開始年齢

## 喫煙開始にかかわる要因について

学生に「吸い始めた動機」について質問した回答では、次の表（４）である。喫煙動機

表４ 吸い始めた動機

	63年度生	%	平成元年度生	%
A－好奇心から	21	28.0	20	31.3
B－友人に勧められて	7	9.3	4	6.3
C－なんとなく	31	41.3	29	45.3
D－親が吸っていた	0	0.0	1	1.6
E－ストレス解消	14	18.7	8	12.5
F－その他	2	2.7	2	3.1
合 計	75		64	

表５ 初回喫煙動機

(%)

	調査	小川他		伊 藤		重信他	氏井他	
	年齢	中学生		高校生		大 学 生		
	性別	男	女	男	女	男	男	女
	人数	491	455	62	21	4297	208	66
好奇心		38.6	46.6	—	—	44.1	32.5	41.7
なんとなく		19.7	20.7	74.2	66.7	41.8	43.5	23.9
友達の勧め		19.1	22.4	33.9	23.8	—	(人の勧め)	
その他の人の勧め		10.4	10.3	—	—	—	12.7	23.9
親の勧め		9.3	5.2	—	—	—		
先輩の勧め		2.2	0.0	—	—	—		
友達が吸っていた		4.9	5.2	—	—	—	—	—
カッコいい		0.5	1.7	6.5	0.0	—	—	—
香りがよい		2.2	0.0	—	—	—	—	—
まね		—	—	6.5	4.8	—	—	—
大人の仲間入り		—	—	6.5	4.8	—	—	—
つき合い		—	—	—	—	20.8	—	—

としては〔なんとなく〕が最も多く、次いで〔好奇心〕〔ストレス解消〕の順である。大学生を対象にした他の調査によると高校時代初めて喫煙した者が54.5%で最も多く、表(5)厚生省調べに喫煙動機としては〔好奇心〕が最も多く、次いで〔なんとなく〕〔つきあい〕の順である。喫煙のきっかけとしては、〔好奇心〕〔なんとなく〕が全体の7割を占め、次いで〔人に勧められて〕である。喫煙動機に関しては、他の調査でも同様の結果が得られている。以上のことから、〔好奇心〕〔なんとなく〕は初回喫煙開始の2大動機であるといえよう。〔なんとなく〕と言う回答が本学生も全国大学生調査でも多いのは、初めて吸ったときの動機が、はっきりした意識によるものでなく従って鮮明な記憶として残らないからであろう。非喫煙者が、何故タバコを吸うようになるかの原因を明らかにするにあたっては、回答率の少ないこれ以外の動機、なかでも〔友人に勧められて〕、〔かっこよさ〕などに注目する必要がある。

本学学生の喫煙者の中で、きまぐれにしろ、常習的に吸うにしても、どの程度の本数を吸っているかを聞いたのが次の表(6)である。〔10本未満〕が63年度生で約40% 平成元

表6 一日の喫煙本数

	63年度生	%	平成元年度生	%
A-10本未満	29	39.2	32	53.3
B-20本未満	36	48.6	21	35.0
C-20本以上	9	12.2	4	6.7
D-回答なし	0	5.5	3	5.0
合計	74		60	

年度生で53%で、次いで〔20本まで〕になると63年度生は約49%となり、学年が高くなるほど常習喫煙者が多くなると推察される。平成元年度生では、10本までが一番多く、気分的なもの、まわりの雰囲気等での喫煙で常習喫煙に移行しないよう、禁煙教育を、なんらかの方法で実施する事が肝要である。

若年から喫煙を始める学生の家庭、家族は喫煙とのかかわりはどうであるか。

〔家族の中で喫煙者は、いるか、また誰であるか〕の間では、表(7)がその回答である。全体として63年度生61.5% 平成元年度生66% の家族に喫煙者が居る事になる。表(8)が示すように特に父親に至っては64%を占め日本の男性喫煙率が高いのも、うなずける。学生の中で、吸う 時々吸うと答えた家族では約77%を占め、前に述べた、自分の家で、家にあったタバコを、一人での、図式がここでも当てはまる。一度もタバコを吸ったことがないと答えた学生では、半数が家族に喫煙者が居ないのである。



表7 家族に喫煙者がいるか

63年度生	全体でみると N = 400	喫煙学生 (時々も含む) N = 74	現在は 吸わない N = 86	非喫煙者 N = 240
いる	61.5% (246人)	80% (59人)	73% (63人)	52% (124人)
いない	38.5% (154人)	20% (15人)	27% (23人)	48% (116人)
平成元年度生	N = 404	N = 60	N = 91	N = 253
いる	66% (267人)	75% (45人)	72.5% (66人)	61.7% (156人)
いない	34% (137人)	25% (15人)	27.5% (25人)	38.3% (97人)

以上のことから、非喫煙者がタバコを吸うようになる一般状況は、小学生又は中学生のときに好奇心から、自分の家で、家にあったタバコを一人または複数で吸うというパターンである。従って初めてタバコを吸うか否かは、家庭ないし家族とのかかわりが特に大きいと言えよう。

本学学生に「あなたが、タバコを吸うことを、家族の者は知っていますか」の問いの回答が図（5）である。これから見ると、女子学生の喫煙を親は容認しているようであるが、

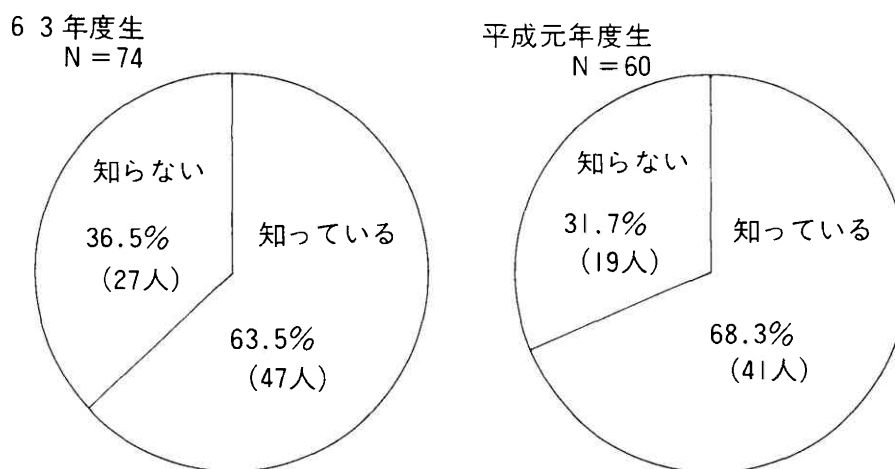


図5 家族の者は知っているか

表 8 それは誰か(複数回答)

	63年度生	平成元年度生
父	64.0% (157人)	80.5% (215人)
母	11.0% (27人)	15.4% (41人)
兄	13.8% (34人)	22.5% (60人)
弟	4.1% (10人)	3.7% (10人)
姉	1.2% (3人)	6.4% (17人)
妹		1.1% (3人)
祖父	2.0% (5人)	2.6% (7人)
祖母	4.1% (10人)	0.7% (2人)
叔母		0.3% (1人)

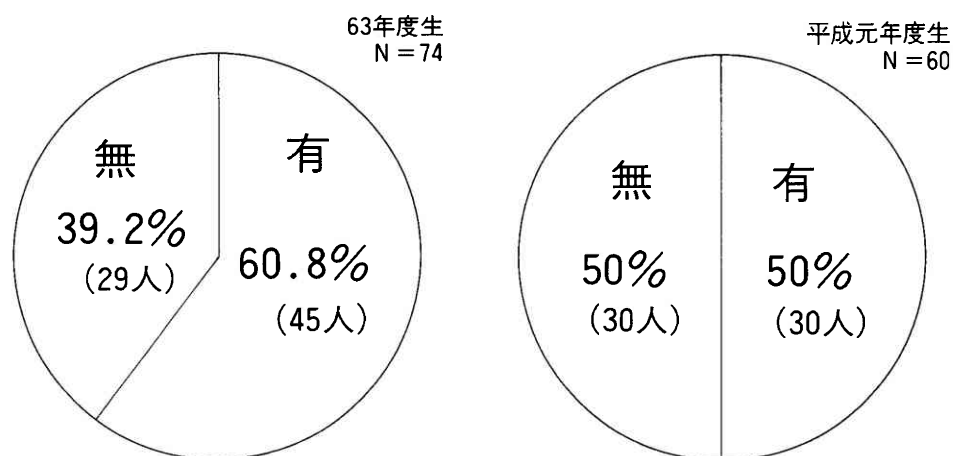


図 6 親と話しあった事があるか

〔タバコについて話し合った事があるかどうか〕聞いて見ると図（6）がその回答である。この図からでも推察出来るように、子供の喫煙を親は知っているが、否定的態度をとるのでもなく、その事について注意、話し合う事もなく、容認と言うより、親の権威のとどこかないところで、子供が、大学生となった今、なすがままの、ものわかりのよい親像を演じているようである。

喫煙女性が次第にふえていることは、身のまわりを見れば明らかであり、特に若年層の増加傾向は前に述べた通りである。

このように若年から喫煙へ走る学生は、禁煙についての教育を受けているのであろうか。この事について質問をしてみた。

〔喫煙と健康についての保健教育を受けたことがありますか〕の質問に対する答えが表（9）である。教育を受けたことが〔ある〕と答えた学生が約79%、ほとんどの学生が何等かの形で禁煙教育を受けているのである。喫煙学生のみを調べて見ても〔ある〕と答えた学生63年度生85.1% 平成元年度生81.7%あり、中学生で59% 高等学校35%が保健教育の一環として禁煙についての教育をほとんどの学生が受けているのである。喫煙動機のデ

喫煙教育を受けた事があるか

	63年度生 N=400	平成元年度生 N=404
ある	78.0% (312人)	79.2% (320人)
ない	21.5% (86人)	20.5% (83人)
回答なし	0.5% (2人)	0.2% (1人)

いつ頃受けたか(複数回答)

	63年度生	平成元年度生
小学校	2.7% (2人)	
中学校	59.5% (44人)	62.1% (36人)
高等学校	35.1% (26人)	37.9% (22人)
回答なし	2.7% (2人)	

喫煙学生に対して聞いてみると

	63年度生 N=74	平成元年度生 N=60
ある	85.1% (63人)	81.7% (49人)
ない	14.9% (11人)	18.3% (11人)

表 9

ーターで述べたように、喫煙を始めるきっかけは、心理的、社会的（カッコいい・大人っぽくみられたい・友達との付き合いがうまくいく……）な面が強く、将来の健康と結びつかないところに、中学校、高等学校で受ける禁煙に関する保健教育の難しいところであろう。中学校で最も多くの学生が禁煙教育を受けているのであるが、喫煙が身体的健康に害を及ぼすことを詳しく説明している教科書は少なく、保健教育において喫煙が健康に及ぼす影響についての科学的な知識を、児童生徒に与える事であるが、現行の教科書の内容は決してそのためには十分であるとはいえないと、識者は忠告している。中学校、高等学校で禁煙に関する教育がどの程度行われているか、種々の調査結果からみると、喫煙防止教育の実施状況は地域によっても差があり、喫煙防止教育の主要な位置を占める保健科の授業も、学校教育の全体からみても、教師自身が喫煙防止の重要性を認識し徹底した研究が強く望まれる。反社会的行動としての取り扱いでなく、健康教育の立場から喫煙防止を研究し、研究会においてもその成果が発表され評価を受けつつある。

このように、ほとんどの学生が、禁煙教育を中学校、高等学校で受けているが故に、〔喫煙による健康への害〕はの質問の答えが表（10）である。害があると答えた喫煙学生は、63年度生で85%平成元年度生が76%である。タバコが身体に悪いことは、誰でも知っている

表10 喫煙による健康への害

	63年度生 N=74	平成元年度生 N=60
ある	85.1% (63人)	76.7% (46人)
ない	5.4% (4人)	6.7% (4人)
わからない	9.5% (7人)	15.0% (9人)
回答なし		1.7% (1人)

ことで、それが、行動に結びつかないところに、禁煙教育の難しさがある。

喫煙とかかわっている疾病、身体へ影響を知っているだけ書かせた結果が次の表（11）である。表でも分かるように肺癌が最も多く360人の学生が筆頭にあげている。つづいて妊婦の胎児の発育障害が234人と女性特有の障害も知識として把握してはいるのである。呼吸器機能の低下、息切れ、慢性気管支炎などと続き、ばらばらではあるが、なんとなく、身

体には、よくないことであると知識としては、認識しているようである。

喫煙学生と、タバコを吸わない学生では、非喫煙学生の方が、当然のことながら、具体的に障害例を挙げ周知度も高い。

また近年話題になり、嫌煙権の発端となった受動喫煙〔間接喫煙〕に関する周知度は、

表11 喫煙による健康障害をあげる(複数回答)

	全体で	喫煙者	非喫煙者
肺がん	360人	79人	281人
その他のがん	75人	17人	58人
循環器	82人	20人	62人
呼吸器	38人	9人	29人
妊婦と小児に対する影響	234人	50人	184人
その他の疾患	151人	43人	108人

↓  
 体力低下  
 肌あれ  
 口臭・歯がきたなくなる  
 Ca.VitCの不足  
 成長がとまる

〔受動喫煙による害〕の回答が表(12)である。タバコの煙りが非喫煙者の健康に悪い影響を及ぼすことを認めた者、63年度生82.4%、平成元年度生75%と、かなり多い数である。事実いろいろの研究報告で、副流煙の方がはるかに毒性が強いと分析結果を発表している。受動喫煙の他人に及ぼす身体的害や、空気の汚染など、科学的な資料を提供しながら、喫煙防止教育に組み込むことが重要な、ポイントになってくる。

ここで特に女性特有の喫煙害について考えてみたい。学生のタバコにかかわる疾病を挙げさせた中に多くの学生が、妊娠、分娩にかかわる害をあげている。

喫煙により不妊娠のリスクが高まる。喫煙により閉経が1～2年早まる。妊婦の喫煙は低出生体重。早産と密接に関係している。

妊娠中の喫煙により、自然流産や、先天奇形のリスクの増加、妊娠前のみでなく、妊娠初期においても禁煙すれば、低出生体重や、早産のリスクが低下改善されることが、内外の調査成績により示され、認められている。

小児への受動喫煙の影響は、受動喫煙による小児の肺機能の低下がみられるようであり、

表12 受動喫煙による害

	63年度生 N=74	平成元年度生 N=60
ある	82.4% (61人)	75.0% (45人)
ない	9.5% (7人)	8.3% (5人)
わからない	5.4% (4人)	13.3% (8人)
回答なし	2.7% (2人)	3.3% (2人)

呼吸疾患との関係についても肯定的に報告されている。

前に述べたように、タバコを吸わないと答えた学生が、タバコの害についての周知度が高く、広範囲に知識を吸収し理解している。しかし喫煙学生においては、周知度はやや低いものの相当の知識はもちながら、それが禁煙と結びつかない現実がある。直接的に、痛いとか、苦しいなど、より常習喫煙になれば、生理的に身体が要求する状態であるから、健康教育、しつけ教育と健康を幅広くとらえ、人間の生き方すべてにかかわる人間教育として、とりくみ、くり返し行われることが肝要である。

喫煙を始める年齢が若いほど、タバコの影響が大きいと言うことである。若年層の喫煙が増大している現実、未成年者の喫煙について本学学生はどのように考えているか。〔未成年の喫煙について〕聞いてみた。表(13)が回答の結果である。喫煙学生は、半分以上が

表13 未成年者の喫煙について

	63年度生 N=400	平成元年度生 N=404
悪い	52.2% (209人)	56.7% (229人)
どちらとも 云えない	47.3% (189人)	40.8% (165人)
回答なし	0.5% (2人)	2.5% (10人)

悪いと答え、どちらとも言えないと答えた学生が約45%もある。成人になればタバコを吸うことが認められているので、はっきりした否定につながらない回答になったようだ。前にも述べたように未成年者喫煙防止法はそれほど厳密に施行されていないのは、衆知のとおりである。今の青少年は法を破ることに對する罪悪感に欠けるところがあるといえなくもない。「赤信号、みんなで渡ればこわくない」というように付和雷同的な傾向も強くみられる。しかし喫煙に関しては、大人も含めて日本人全体が、未成年者喫煙禁止法なる法律をそれほど意識しているとはおもえない。ただ順法的なしつけ教育を重視するというのであれば、大学生の未成年者の喫煙もきびしく規制するべきである。

かつて7、5、3つまり高校で7割、中学で5割、小学校3割がタバコを吸っているといわれた時代があったが、現実はずっと多いと考えられる。なぜこうなったのか。第一に「許された環境」になったこと、家庭でも、学校でも、運動部でも黙認し、それに自動販売

表14 成人の喫煙について

	63年度生 N=400	平成元年度生 N=404
どちらかと 云うと悪い	22.0% (88人)	25.7% (104人)
どちらとも 云えない	8.0% (32人)	12.9% (52人)
個人の自由	69.5% (278人)	59.9% (242人)
回答なし	0.5% (2人)	1.5% (6人)

機、世界一値段が安い、テレビCM、マンガの中での宣伝、軽いタバコなので、初喫煙のときから楽に吸えるなどから、常習喫煙になりやすい土壌がある。

女子生徒、学生の喫煙率増加は憂慮すべきものであるが、同年令の男子たちよりまだいくぶんなりとも喫煙率は低い。しかし、諸外国からの報告ではギリシャ、キューバー、中国など小数の例外を除いてティーンエイジャーの喫煙率は女子生徒たちの方が男子を凌駕している国が多いと報告されている。

学生は喫煙の健康影響に関する知識は、考えていたより周知度が高いのであるが、正確に理解されているかとなると疑問であり、知識の理解や深さを把握するための調査研究や、正確な知識の普及が望まれる。

学生達は成人の喫煙に対しての態度はどうであるか。〔成人の喫煙について〕問の回答が

次ぎの表（14）と（15）である。表（15）でわかるように喫煙学生では〔個人の自由〕〔どちらともいえない〕を合わせると63年度生94.6%平成元年度生78.3%と大人の喫煙に対しては認め寛容で肯定的態度である。

**表15** 喫煙学生に成人の喫煙についてたずねてみると

	63年度生 N=74	平成元年度生 N=60
どちらかと 云うと悪い	5.4% (4人)	20.0% (12人)
どちらとも 云えない	5.4% (4人)	13.3% (8人)
個人の自由	89.2% (66人)	65.0% (39人)
回答なし		1.7% (1人)

喫煙者が喫煙に対して肯定的態度をとるのは、自己の行為を正当化し、心理的安定を保とうとする合理化規制によるものと考えられる。若年層ほど喫煙の健康に及ぼす影響が大きいといった観点から禁止法を理解させることが必要である。

学内禁煙となり特に食堂、学生ホール、学生の憩いの場所での禁煙は、喫煙学生にとってはつらいことであろう。片隅で遠慮がちに吸っている者、これ見よがしに、何の憚りもなく3、4人が一緒に喫煙し、注意をすれば一応素直に火を消すと言う状態である。

タバコを吸わない学生の上に禁煙場所での喫煙を聞いてみた。学外で〔禁煙場所で吸っ

**表16** 禁煙場所で吸っている人を見て

	63年度生 N=326	平成元年度生 N=344
よくない事 だと思う	82.5% (269人)	75.9% (261人)
何んとも 思わない	14.7% (48人)	20.1% (69人)
回答なし	2.8% (9人)	4.1% (14人)



ている人を見てどう思いますか] 表 (16) がその回答である。よくないと思う63年度生82.5%平成元年度生75.9%である。よくないと回答した学生に、同席時にとる態度について聞いてみたのが表 (17) である。皆、嫌なおもいをしているのであるが、63年度生45%、平成元年度生33%が黙認する (みすごす) と答え、せめて人によっては、嫌な顔をしたり聞こえよがしに、間接的に注意らしき発言をしたり意志表示をする程度である。しかし友達の場合はどうであろうか、一般の人と違って友人の場合は様子が変わってくる。表 (18) でわかるように、注意するが63年度生51%、平成元年度生43%となり、意志表示も含めると、約68%近くが牽制していることになる。学外での禁煙場所での喫煙は体面も悪く注意

表17 よくない事だと思う (同席のとき)

	63年度生 N = 269	平成元年度生 N = 261
注意する	2.2% (6人)	1.5% (4人)
意志表示	49.8% (134人)	51.0% (133人)
みすごす	45.0% (121人)	33.0% (86人)
回答なし	3.0% (8人)	14.6% (38人)

表18 同席で (友人のとき)

	63年度生 N = 269	平成元年度生 N = 261
注意する	50.6% (136人)	43.3% (113人)
意志表示	18.2% (49人)	18.8% (49人)
みすごす	30.5% (82人)	32.6% (85人)
回答なし	0.7% (2人)	5.4% (14人)

しあうのであるが、学内になると、お互いに甘えや、それほど悪いことではない、大学生だからと黙認が多いような状態である。そんなことから、学生同志の牽制による禁煙は期待できない。

## ま と め

喫煙については、開始、習慣形式、維持、そして節煙または禁煙というように、多様な段階があり、禁煙対策プログラムの目標としては、喫煙者が減少し、喫煙開始者が増加しないことである。

本学生の喫煙は全学生対象の調査は行っていないが1年生、2年生の今回の調査では、喫煙学生、吸った経験があるを合わせると、図1が示すように、中学校、高等学校からかなりの学生がすでに吸い始め、2年生の喫煙率から見ると大学生になったからの喫煙開始者も多分に居る事が推察できる。全体的に一般女性喫煙率より、高い喫煙率になり、3、4年生を合わせると、かなりの喫煙学生がいる（在籍）ことになる。入学当初からの喫煙学生が常習喫煙者となる可能性が強く、女子大学生の喫煙行動の背景要因について、家族より友人の喫煙状況の関与が強いことから、喫煙学生の持つ外交的で積極的な性格から、非喫煙学生に及ぼす影響も大きく、入学時にかなりの喫煙学生がいることを我々も認識し、その対策を考えなければならない。若年女性の喫煙は、世界各国増加の一途をたどっているなかで、日本もその域を出ない。諸外国における青少年にたいする喫煙防止教育は、学校を基盤とし、正式に教科の内容として授業が行われる場合が多く、オーストリア、アメリカ合衆国、イスラエル、ルーマニア、チェコスロバキア、フランス、ベルギー、ノルウェーなどがそうである。特にアメリカでは、徹底したプログラムが生まれ、実施形態は、スクールキャンペーン、マスコミュニケーション、メッセージの伝達、クラス単位で行われる授業などがある。指導方法には、講義、討論、フィルムないしビデオテープなどの視聴覚メディアや実験装置の利用、ポスターの制作掲示、グループディスカッション、ロール・プレーイングなどがある。内容のねらいとしては、生徒、学生に喫煙が短期的あるいは長期的に身体に及ぼす生理的影響に関する知識や認識を深めさせることや、青少年の喫煙行動が周囲の者に与える影響を認識させ、それに抵抗するための技能（skill）を習得させることとしている。

最終的にめざす目標は、主として禁煙対策の認識や態度の育成を意図するものと、非喫煙者の喫煙開始を防止することにある。

それぞれの国で独自のプログラムを立て、熱心に実践されている実例は多く紹介されているが、日本では、国をあげての取り組みもやっと、おみこしをあげつつある現状であり男性喫煙率61.2%は、先進国としては、恥ずかしい数字である。

タバコは酒、お茶、コーヒー等とともに世界中の多くの地域の人々に共通の嗜好品とし

て親しまれている。しかしタバコの有害性は疑う余地はない。どんな吸い方をしても、誰にとっても全く無害ということはない。それであれば、「吸わないに越したことはない」……………しかし事実タバコを好んで吸っている人には、それなりの健康上の効用があると言う……………。

つまりタバコの効用が発揮される適性喫煙ということである。一歩ゆずって、精神的リラックスの効用を認められるにしても、若年層の常習喫煙と、女性の妊娠時、育児期間の喫煙は、さけないものである。

本学においては保健教育（健康教育）の一環として学生が今まで持っている喫煙に対する知識を整理し、新しい知識を身につけ、積極的な態度を形成することによって、彼女等が進んで個人的健康実践に関する積極的な意志決定ができるようにさせることであり、学生に対して多様なメディアを利用したさまざまな学習経験を与えることが必要である。学生部、保健室と密接に連絡をとりながらそれぞれの立場で、機会あるごとにいろいろな方法で繰り返し、学生にアプローチすることである。

#### 参 考 文 献

- 1、厚生省編 喫煙と健康
- 2、千葉 康則 なぜ人はたばこを吸うのか
- 3、浅野 牧茂 たばこの健康学
- 4、社団法人新情報センター 健康と喫煙問題に関する国民の意識調査